

小1 おおきなかぶ

研究主題 主体的な読みを育む学習指導の在り方
—小学校第1学年「おおきな かぶ」における音読指導を通して—

日立市立東小沢小学校 緑川 伸江

I はじめに

現代は、高度情報化や少子高齢化、グローバル化などが急速に進む、極めて変化の激しい時代である。そうした社会の変化の中にある子ども達には、本県の学校教育指導方針や本市の学校教育でも掲げている通り、基礎・基本の定着と思考力・判断力・表現力等を育む教育が一層重視されている。そのためには、発達段階に応じて、国語科を中心とした言語活動の充実はとても重要な意味をもつ。その中でも、小学校低学年においては、表現力を育成するために、言葉の意味や文の内容を把握するための音読などの活動はとても重要なものとする。

本研究では、平仮名の読み書きを一通り終え、読み物へ興味・関心を見せるようになってきている時期の児童において、場面の様子や人物について想像しながら読む力をつけたいと考える。児童主体の音読やワークシート等を活用し、表現することや交流することの楽しさを体感させたり、「音読発表会」というゴールを示したりする等、ねらいを明確に示すことで、児童の学ぶ意欲が高まる。また、語のまとまりや言葉の響きに気をつけて、想像を広げながら楽しく文章を読めるように、視覚的な教材やICレコーダーを活用した活動も取入れ、表現力の育成を目指していきたい。

II 研究の仮説

- 1 カードやワークシート等、視覚的に捉えやすい手立てを工夫することで、主体的に場面の様子や人物について想像しながら読む力が高まるであろう。
- 2 読む目的や学習のゴールを明確にもたせることで、意欲的に読み進めることが出来るであろう。

III 実践事例

1 学習指導案

本時の授業のテーマ：語のまとまりや言葉の響きに気をつけて、想像を広げながら文章を楽しく工夫して読むことができる。

(1) 単元名 おおきなかぶ

(2) 目 標

- 物語に興味を持ち、場面の展開を楽しんで読もうとする。(国語への関心・意欲・態度)
- 語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて読むことができる。(読むこと)
- 場面の様子や登場人物について想像を広げながら読むことができる。(読むこと)
- 敬体で書かれた文章に慣れ、読むことができる。(伝統的な言語文化・国語の特質に関する事項)

(3) 単元について

本単元で扱う「おおきなかぶ」の教材文は、繰り返しの言葉やリズム感のある文章が特徴的で、次々に人物が登場してくるおもしろさもある。人物が増えることで場面が展開していくので、児

童にも場面の様子がとらえやすい。「うんとこしょ、どっこいしょ。」の会話や「かぶはぬけません」などの繰り返しの表現は、リズムよく読めるので音読の楽しさを実感するのに適した教材であると考える。

児童はこれまでに、ひらがな 50 音を覚え、「は・へ・を」を使った簡単な文を作り読み合ったり、読み聞かせによりいろいろなお話に触れたりしてきた。また、家庭では毎日、教科書や借りた本の音読を行っており、少しずつ語のまとまりに気をつけて文を読めるようになってきている。

実態調査から分かるように、児童は読書が好きで音読も好きである。しかし、実際に音読すると、声の調子が同じ調子で、お話の場面に沿った読み方はできておらず、場面の様子の想像を広げて読むことに課題が見られる。

実態調査

(平成 28 年 6 月 20 日 3 人)

1	国語は好きか。	好き 3 人	きらい 0 人
2	本を読むのは好きか。	好き 3 人	きらい 0 人
3	音読は好きか。	好き 3 人	きらい 0 人
4	お話の場面に沿った読み方（声の出し方）ができる。	できる 1 人	できない 2 人
5	文のまとまりに気をつけて音読できる。	できる 2 人	できない 1 人

指導にあたっては、まず導入の段階で「音読発表会」というゴールを明確に示し、学習の見通しがもてるようにする。言語活動として、教科書には書いていない台詞を考えたり、場面ごとにその場면을盛り上げる言葉はどれかを考えたりする活動を位置付けた。場면을盛り上げる言葉については、どのように音読したらよいかを、「声のトーンカード」を使って考えていく。カードは、声の大きさや伸ばし方を示したカードにすることで、視覚的にも児童が場面の様子を想像しながら考えやすいように工夫した。また、自分が考える読み方を示すことができるワークシートに自分の考えをまとめ、それをもとに音読発表会を行うことで、付けたい力が実現できると考えた。したがって、本単元でねらう「主体的な読みを育む」のにふさわしい言語活動である。

(4) 指導・評価計画（7時間取り扱い）○は本時

次	時	主な学習活動・内容	評価規準
1	1	学習の見通しをもつ。 ・学習課題をつかむ。 ・全体を音読し、おもしろいところを話し合う。	・物語のおもしろいところについて話し合い、音読発表することに意欲的に取り組もうとしている。 (国語への関心・意欲・態度)
2	2	・登場人物を順にとらえ、場面の様子を想像しながらよむ。	・音読をしながら、人物が出てくる順を読み取っている。 (読む能力)
	③	・かぶに込めたおじいさんの願いを想像して音読する。	・おじいさんの気持ちを想像しながら、音読している。 (読む能力)
	4	・他の人物を呼ぶときの様子を想像しながら音読する。	・人物がほかの人物を呼ぶときの様子をそれぞれ想像しながら音読している。 (読む能力)
	5	・「～、かぶはぬけません。」の違いを想像しながら、かぶが抜けぬ様子を音読する。	・繰り返しの表現に気をつけて、場面の様子を想像しながら音読している。 (読む能力)
	6	・場面を思い描きながら、人数が増えていく様子を表せるように音読する。	・違いを捉えて、リズムカルに力強く音読している。 (読む能力)
3	7	・音読発表会を行う。	・場面の様子に沿った音読の工夫をしている。 (読む能力)

(5) 本時の指導

① 目 標

かぶに込めたおじいさんの願いや大きいかぶができたときのおじいさんの気持ちを想像する活動を通して、語のまとまりや言葉の響きに気をつけて、文章を楽しく工夫して読むことができる。

② 準備・資料

掲示資料（カード、登場人物の挿絵）

ワークシート

振り返りカード

ICレコーダー

③ 展 開

学習活動・内容	指導上の留意点
1 本時の課題をつかむ。 おじいさんのきもちをかんがえて、おはなしをよもう。 (1) 前時までの学習を振り返る。 (2) 課題について話し合う。 ・さつまいもを植えたときのことを想起する。 大きくそだってね。 うれしいけど、とるのが大変そう！！ 2 おじいさんの気持ちについて考え、工夫して音読する。 (1) カードを使って、どのような読み方が適切か考える。 あ ま い、 あ ま い あ ま い、 あ ま い あ ま い、 あ ま い (2) とてつもなく大きいかぶができたときのおじいさんの様子を考える。(ワークシート) びっくりしたなあ！！ なんて大きいんだ！！ (3) ワークシートをもとに、「あまい、げんきのよい、とてつもなくおおきいかぶができました。」の文を工夫して音読する。 3 カードとワークシートをもとに、最初の場面の文を工夫して音読する。(ICレコーダー) 4 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を知る。	指導上の留意点 ○個への配慮◎課題研究にせまるための手立て(評)評価 ・本時は、最初の方の場面でのおじいさんの気持ちについて考え、工夫して音読していくことを確認する。 ・登場人物の確認と大まかなお話の内容について振り返る。 ・生活科でさつまいもを植えたときのことを思い出し、植えているときどんな気持ちであったか、もし、とてつもなく大きなさつまいもが実ったらと考えることで、抵抗なく課題について考えられるようにする。 ・「あまい、あまいかぶになれ。」と「おおきなおおきなかぶになれ。」について、声の強弱カードやICレコーダーの音声をもとに、どのように工夫して読むと良いかを考えることで、場面の様子を想像する手立てとする。 ◎表現力の育成として、いくつか声の強弱をカードに示し、視覚的に提示することで、どこを強く読むとおじいさんの気持ちに近づくかを考えやすいようにする。(視覚化) ◎すぐに考え付いた児童については、声の強弱だけではなく、文字と文字の間を伸ばして言うなど、さらに工夫するよう助言する。 ・さつまいもを植えたときのことを再度想起させながら、自分だったら何と言うか考えやすいようにする。 ○考えるのが難しそうな児童には、おじいさんの気持ちを表した言葉をいくつか提示し、そこから選んで書けるようにする。 ・おじいさんの表情やしぐさにも注目させ、おじいさんの気持ちを想像させる。(焦点化) ・ワークシートで考えたおじいさんの気持ちを汲み取って、工夫して音読できるように助言する。 ○工夫して音読するのが難しい児童には、カードを提示し、どのように読めばよいか考えられるようにする。 (評) カードやワークシートをもとに、おじいさんの気持ちに沿って、工夫して音読している姿が見られれば、本時の目標を達成できたととらえる。(観察・ワークシート) ・本時のめあてに対してできるようになったことを記入し、学習内容に沿って振り返りができている児童を指名し、学習の成果を共有化できるようにする。 ・次時は、他の登場人物を呼ぶおじいさんの場面を中心に音読することを伝え、次の学習への意欲を高める。

④ 指導の実際

ア 研究主題に迫るための手立て

(ア) 写真の活用

生活科でさつまいもを植えたときのことを想起させ、抵抗なく課題について考えられるようにした。児童はそのときの様子や、もしとてつもなく大きなさつまいもが実ったらなんと言うかについて、楽しげに考えていた。

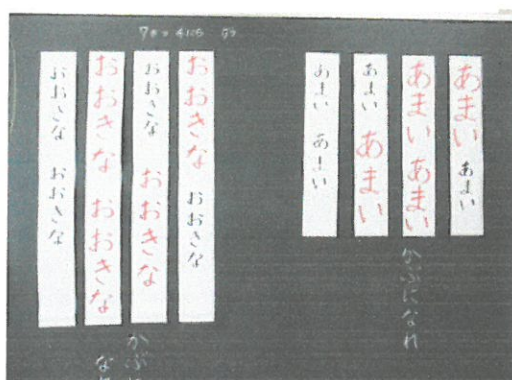
(イ) ICレコーダーの活用①

生活科での実体験を想起した後、物語の最初の部分を全員で音読した。その際、ICレコーダーに録音した。それを聞いて、児童はどの文も同じ声の調子で読んでいることが分かった。

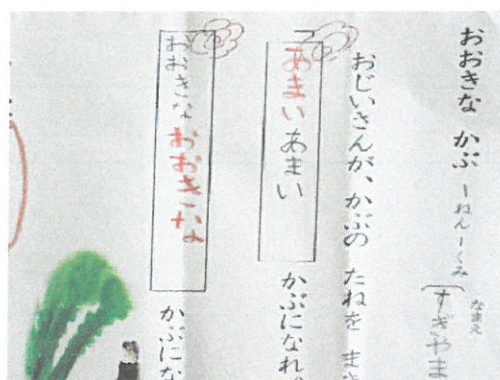
(ウ) 声の強弱カードの活用

カードでは、強く読むところの字を大きく示すだけでなく、赤色で示すようにした。おじいさんが種をまく場面の「あまい あまい かぶになれ」と「おおきな おおきな かぶになれ」について、4種類のカードを用意した。どのように読むとおじいさんの気持ちに近づくか、児童は選んだカードの内容をワークシートに書き写し、自分だけの音読カードを作ることができた。また、声の強弱カードをもとに考えたおじいさんの言葉を音読してみた。強くよむところは気持ちを込めて音読できていた。

資料1 (声の強弱カードの提示)



資料2 (ワークシート1)



(エ) 登場人物の気持ちを考える活動の設定

生活科での実体験のことや、声の強弱カードをもとに考えた音読表現をもとに、「あまい、げんきのよい、とてつもなく おおきい かぶができました。」のときのおじいさんの気持ちを考える活動を設定した。おじいさんの表情やしぐさにも注目させ、考えやすいようにした。

資料3 (ワークシート2)



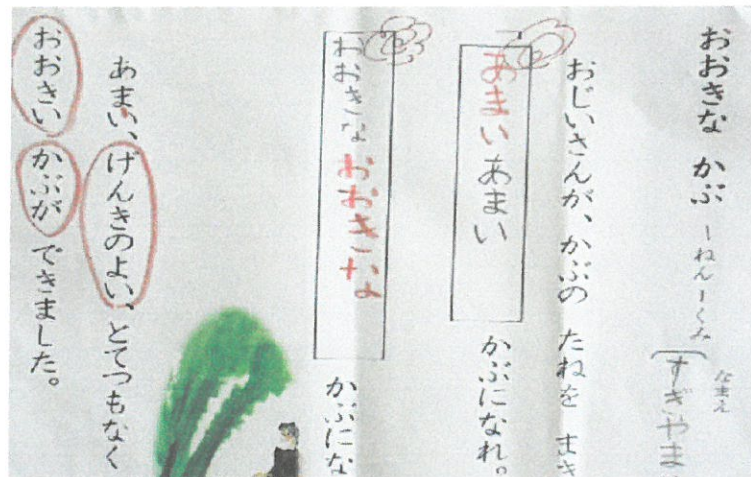
(オ) かぶができた場面についての音読表現の仕方を考える活動の設定

ワークシート2をもとに、「あまい、げんきのよい、とてつもなくおおきい かぶができました。」の音読表現の仕方を一人一人で考えた。強く読むところには赤丸をつけたり、のばして読みたいところには線を引いたり、個々に工夫が見られた。

(カ) ICレコーダーの活用②

一人ずつ、おじいさんが種をまく場面からかぶができた場面までを音読した。最初に読んだときの音読表現との違いを比べることができた。

資料2 (ワークシート1の全体)



IV 研究の成果

- 生活科での実体験を想起することで、自分が体験したときの様子と登場人物の様子とを関連づけられ、かぶの種をまいているときのおじいさんの気持ちを思いながら、音読の仕方を考えることができた。
- 声の大きさや伸ばし方を示したカードを使うことで、視覚的にどのような音読表現をすればよいのか分かりやすく、場面の様子を想像しながら考える手段として有効に働き、どの児童も抵抗なく考えることができた。
- ICレコーダーを活用することで、自分の声だけに注目することができた。最初に読んだときと音読の仕方を考えた後に読んだときで比べることができ、有効であった。

V 今後の課題

今回の研究では、主体的な学びという観点から、語のまとまりや言葉の響きに気をつけて、想像を広げながら楽しく文章を読めるように、視覚的な教材やICレコーダーを活用した活動を位置づけた。その活動の中に、児童がどうしてその音読表現にしたのかの理由を考える活動も取り入れることで、より深い意味を持った表現力を高めることができると考える。今後は、表現力の育成のための活動の中にこのような活動も取り入れていきたい。

参考文献：「小学校学習指導要領解説 国語編」

文部科学省 平成20年4月

「小学校国語科映像指導資料～言語活動の充実を図った「読むこと」の授業づくり～」

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 平成28年3月